

指導言

2023.9.20

「指導言」という言葉がある。授業で教師が発するすべての言葉のことである。教師の発問、助言、指示、説明などを含む。授業の方向性を示す学習課題も指導言である。

授業を参観する機会がある。あの助言をしていれば、子どもは新しい考えを出せたのに、あそこで教師のゆさぶりがあれば、子どもの思考はもっと豊かになっていたのに、学習課題が曖昧で、子どもは何をするのかがわからないなどと感じることがある。

何をするのかが明快でわかりやすい学習課題をつくり出す方法論がない。深い学びを促していく質の高いゆさぶりをつくり出す方法論がない。子ども一人一人が主体的に思考し、読解するための切れ味のある助言をつくり出す方法論がない。

それでも、学習課題などは、ある程度までは意識されるかもしれない。しかし、助言については意識されることが少ない。助言の内容が指導案に書かれることもあまりない。したがって、助言はアドリブで出されることが多い。助言を含め指導言の質を向上させるための研究や検討、準備をもっと意識的に行う必要がある。

課題解決重視の対話型、探究型の授業が求められている今だからこそ、この必要性は高い。子どもたちの主体的な学びを保障するためにも、豊かな対話を実現するためにも、深い学びを生み出すためにも、指導言の質の高さが必要となる。

方法論はないが、どうすればよいのか。授業はセンスである。これでは、話は進まない。確かにセンスのいい先生はいる。きっと、子どもたちのことがよく見えているのである。子どもが何を考え、どんなことを言おうとしているのか、その予想ができるのである。あるいは、教材文を読み、その解釈ができるのである。多様な読み、深い読みができるのである。

センスがよくても、それを磨かなければ、そのまま終わってしまう。毎時間の授業が、磨くための場となる。磨こうと意識しているかどうかである。意識が高ければ、指導言は、どんどん変わってくる。よくなっていく。洗練されていく。意識されなければ、不必要なものが増えていく。それは、わかりにくい授業へと向かう。

授業を担当する教師として、自分の指導言を自分で磨く方法がある。自分の授業をビデオに撮り自分で見るのである。とりあえず、自分一人でもできる方法である。客観的に自分の授業を見る。自分の指導言をチェックする。もっとこうすればよかったという思いを次の授業にぶつける。このような営みは、必ずや力となる。

何事もセンスだけではうまくはいかない。地道な努力が、やがては確かな力となり、実を結ぶようになる。